

「HSK 季刊わたぼうし」 第67号

発行者:わたぼうし連絡会
発行日:2005年(平成17年) 8月20日 '05夏号

第67号の特集

「自立生活支援センター富山」主催
宮城県知事・浅野 史郎氏講演会 III

本当の愛は 貧乏こわがらず

比呂雪



この機関紙は障害のある人、ない人が自由に考えを出し合い、主義・主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

「自立生活支援センター富山」主催
宮城県知事・浅野 史郎氏 講演会 III
＝テーマ：脱施設の施策と実践＝

期 日：2004年 8月 6日（金）

場 所：富山CICいきいきKAN 5階多目的ホール

講 師：宮城県知事・浅野 史郎氏

※お断り：今回、「HSK季刊わたぼうし」の紙面に掲載できなかった講演の部分も、ホームページに掲載させていただきました。

前号からの続き

だけど、ここはどんなに頑張っても、あなたがたにとって天国ではなかったのですね？ こういう言い方ではないけれど、ちょっとわかりやすくというか、私が勝手にアレンジしていますけれども、思いはそういうことです。



地域で生活ができるように

さっき、「○×をつける」という話があったでしょう。上級コースというか長い期間、施設職員をやっている人には、Yさんの話は○なんですよ。「死ぬまで面倒を見る。」それはね、おかしいというのは酷なんですね。

だって自分が給料をもらって、なんとか施設での援護の仕事をしているのですよ。入所者が生身の人間としてそこにいるわけですよ。だったらそこに入っているその人たちにとって、この施設をなんとか天国に、天国ではないけれど、安心できるすごく良いところにして、努力するのは当たり前ではないですか？

そういうふうにしていけば、この人たちは喜ぶだろう？ と思っていなければ続けないですか？ でも、そこが落とし穴。だからそれを別な光をあててみると、やっぱり「ごめんなさい。あなたがたはやっぱり、本当はできたならば地域の中で生活をしたい、と思っているのですね？」遅まきながら気が付きました。

これからはあなたがたにとって、地域で生活できるようにするために条件を整えるように、我々は全力を挙げます。そして、この施設が解体できるように、あなたがた一人一人、最後の一人まで、地域へ出られるように努力をします。ということをまず言った。それは「ごめんなさい。」

親元に帰すのではない、ふるさとに帰す

そのお子さんを「舟形コロニー」に預けたという瞬間が、たぶん、その親御さんにとって介護力のピークですよ。そこから後、その親御さんはどんどん年をとっています。

その「舟形コロニー」に30年も入所しているという人がいる。40才の時、まだ元気なときにお子さんをそこに入れた、という親御さんも今や70才です。ご本人たちがもう介

護を受けなければならない、という年になっています。

そこに、その親元にこの子どもが帰ってくるということは、悪夢ですよ、無理ですよ。そんなことはしない。親元に帰すのではない、ふるさとに帰す。だから、「舟形コロニー」というのは宮城県大和町という所にあるのですけれども、その他の地域から来ている人を、そこに帰す。

そのためには、その地域もそういう人を受け入れられる状況にしておかなければいけない、ということ、これももちろんあるのです。「親元に帰すのではない地域に帰す。」

もう一つですね、それはそこでは言っていないのですけれども、重要な視点を指摘せざるを得ません。それはですね、今、言ったように「解体宣言、知的障害者・入所者を地域に出す」という決意表明・宣言であると同時に、実は宮城県福祉事業団の職員にとっての職業転換宣言なのです。

地域で支える仕事で生かしていくこと

その福祉事業団も田島良昭理事長が「解体します。」と突然言ったのではなく、それまで何年もかけて、福祉事業団の職員の間でディスカッションを重ね、「行こう」というふうにして出したわけです。

福祉事業団の職員が何を考えたかということ、これから5年後、10年後に自分たちの今やっている仕事が、続くだろうか？ 今やっている仕事というのは、施設においてこういう人たちを介助していく、支援していく、ということで飯を食っていけるのだろうか？ どうもそれは少なくともファッションではないか？ 「ファッションではないか？」というのはチョット悪いかも知れません。

そうではない。だったら自分たちで選んで、自分たちの専門性は、この人たちを地域で支える仕事で生かしていくこと。職業転換宣言なのです。それを先取りして、しかも自分たちで言ったということに、ものすごい意義があるのです。

やらされたのではないのです。さっき、全国に53ある福祉事業団が、みんな同じ考えを持っているというのは、これのことなのです。何百人の職員がいるのです。今日も中に何人かいらっしやるけれども、どうするのですか？ 5年後、10年後にこの人たちを。

そこは宮城県の福祉事業団は、ある意味では賢いというか、本当に決意を固めて、今もすでにいろんな形での地域援助、という仕事をしつつあります。そういうようなフィールドを持ってやってきています。これをもう先方一滴にやろうというのが、「舟形コロニー」解体宣言なのです。（途中省略）

最も重い障害を持った人の施設を解体する

それがあって、宮城県全体の知的障害者施設解体宣言ということになりました。これはですね、ずうっと今まで言ってきたことからお分かりになりますように、「舟形コロニー」という知的障害者の中でも、最も重い障害を持った人の施設を解体する。解体できる、というのであれば、それよりもっと軽い施設の解体を、もっと簡単にできるでしょう、という単純なことなのです。

ここでも、無理維持はしない。これは絶対に反対があるということ分かっていたから、無理維持はしない。もちろん、障害者本人にも「出て行け」ということを、もちろん

言わないし、親御さんにも「出して下さい。」ということと言わないし、施設にも「無理矢理解体しろ。」とも言わない。

ただ、我々の決意としては「グループホームを用意します。地域の中で住みやすいような条件を作ります。」つまり、施設と、今までは施設しか選択肢がなかった。施設と地域での生活を比べて、本人たちに選ばせろ。「絶対、こっちを選ばせてみせるぞ。」という決意表明ですから、だから無理維持する必要はない、と思っているわけですね。

しかし、施設を運営する側の人も、いずれは解体する。つまり、あなたがたも今の施設運営だけに道を究めるのではなくて、その人たちの幸せを考えれば、一人一人が地域の中で生活できるようにするためには何をしたらいいのか？ ということ、一生懸命に頑張りたい、という連帯のあいさつなのですよ。

先日、宮城県知的障害者施設の施設長会議で、この説明をしました。菊池さんという方が会長なのです。菊池さんは非常に理解がある人で、もう自分の所も早く解体する。そういう人が宮城県の施設長会議のトップということで、非常にラッキーであるのです。他の施設長さん必ずしも全員「パッタパッタ」ではないのです。私はずうっと他の所でもこういう言い方をしてきました。

300年経っても解体できない

「これは、さっき解体業者がすぐに電話してきた笑い話にしましたけれども、100年かかっても良い。」と言っているわけです。だからここで宣言を、こういう宣言を明確に出さなければ、300年経ったって解体なんかできない。300年経った宮城県にこういう施設が健全としてあって、そこに入所者がいっぱいいて、みんな無期懲役で入っているという状況が300年後もあると。こういうのは自然になくなるわけじゃないですね。誰かが意志を持ってやらなければ、動かないですよ。だからやると、100年かかるかも知れない。これ、言葉のあやさ、100年というのは。

だけど100年もかからないで、我々は努力すれば50年でこれ、解体できるかも知れない。もっと頑張れば30年でできるかも知れない。20年ではどう？ 10年でやってみるか？ なるかも知れない？ ここに持ってきて話しが完結する訳よ。

ところがですね、その施設長会議でそれを言ったら、「100年かかっても」というところだけ、ガチッと頭に入っちゃっているのです。だから菊池さんに言われて、「浅野知事、あういう言い方だと困る。」

何故かという、100年か。他の施設長さんは「オレ、もう生きていないわ、その時。つまり自分が生きている間に何もしなくても良いと思っている。」それから後は、そういう言い方はしないようにしていますけれども、でも、まあ、そういうことです。その無理維持ではない。それはそういうふうにやってみせる。最後の方に、「最後の論行を読んで欲しい。」という感じではあるのです。途中いろいろありますけれども、繰り返して言っているのですから、繰り返すわけですが。

障害福祉の目的は？

障害福祉の目的は「障害者が普通の生活を送れるようにすることである。そのために今、それぞれの立場で何を為すべきか？ 辿り着くべき島影をしっかりと視野に入れて、船の進む

べき方向は間違わないように、荒波を乗り越えつつ進んで行かなければならない。例えば時間がかかっても（これ、100年のこと）必ず目指す島に到達することはできると信じている。同じ船と一緒に乗り込んで欲しい。」最後に「同じ船と一緒に乗り込んで欲しい。」という連帯のあいさつなのでですね。これは宮城県知事が発しているのですけれども、これに関わっている人、みんな、いろんな登場人物がいるわけですよ。もちろん施設を行っている人、親御さんも、本人も、行政も、地域の人も同じ船に乗り込んで欲しい。

それを言うためには、どの島に向かっているかということを示さなかったならば、船に乗り込んでどうやって進んで行ったら良いかが分からないではないですか？ これ単なる漂っているという状態。

「あそこの島影だ。」これが宣言ですね。

「あそこの島影だ。」これが宣言ですね。知事というのは、こういうことができるのだな。本当のことというと、これのメインターゲットは宮城県庁の障害福祉課の職員なのです。今の宮城県庁の障害福祉課の職員は大丈夫なのです。これ何度もディスカッションしてやろうしていることを分かっているのです。全員分かっています。だけど、来年どうですか？

再来年どうですか？ 半数変わりますよ、障害福祉課が、浅野知事だってわからない。24年もたぶんやっていないだろう。私は10期やっても85才ですよ、年齢的にいうと、どうなるかわからない。そういう時にこういう連合化したものが必要なのです。この宣言、バイブルとまでは言わないけれど、一応宣言。これが新しく障害福祉課長になった人、職員になった人はこれを見るよね、読むよね。これがあるということを周りも知っているよね。という状態にしたかったのです。ここでいう島影というのは、実は非常にこの仕事に限らず、宮城県のいろんな場面での仕事をやっていくときに、知事は指し示さなければいけない。

すぐに偉そうに言うけれど、島影は示した。だけど、船で行くときに途中には荒波はあるし、浅瀬もあったり、大変な台風が待ちかまえていたり、大変なのです。だから、今何をやっているかということ、あそこに船は向けたけれど、進むスピードはどうなるかわからない、ということではある。これを発しているいろんな反応がありました。親御さんの反応はかなり省略しましたが、それでも、「そうではないよ」だんだんわかって。

ラジオで特集番組

TBSラジオの「アクセス」という番組があって、それでこれを発した2月末ぐらいに特集番組を組んで、僕も電話で参加して説明をしました。聴取者がいろんなそれに対する意見があって、それがインターネットで配信されて来て、私のところにも来ました。本当に50何通ですが、34通が賛成、17通が反対、後残りがわからないでした。17通の反対意見を読んで、暗澹たる気持ちとかショックを受けました。

どういうふうを書いてあると言ったら、「その人たちを地域に出すのなら刑法を改正して、ちゃんとその人たちも刑罰を課せられるようにしてからにして欲しい。その人たちを地域に出すのは、野獣を放すもんだ。ダメだ。実はこの人たちは施設に入っていることが一番幸せなんだ。余計なことをするな。この人たちが街中で突然奇声を発したり、乱暴なことをやったりして、とても一緒に住んでいけない。施設に入っているべきだ。」こうい

う内容ばかりなのです。(途中省略)

障害児教育の島影は統合教育

実は私の障害児教育の島影は統合教育なのです。それは教育長の方が少し意欲的なのです。私は「100年かかっても」と遠慮深く言っているのに、教育長は平成26年とハッキリ言っている。平成26年までに全部、養護学校もなくすみたいなことを言っている。私の方が心配になってきましたね。今、どのぐらいいるの？ 何百人もいるのに、今4人しかまだ統合教育の対象になっていない。それで、良い度胸ですよ。

だけど方向性はそうなんです。それは、実はこれについてはですね、統合教育については、知事としては教育庁、ここでずいぶん議論をしてきました。私も一生懸命「統合教育が必要だ。」教育長側の方は一生懸命抵抗ですよ。大体言うことはわかっているのです。

「何で知的障害を持っている人が、普通学校に来たがるの？ 見栄じゃないの？ 自分の子がないと見せかけようとする見栄じゃないの？」単なる流行に載せられているだけなの？ それこそ無知なのです。

養護学校に行ったならば本当に少人数で、その子の障害にあったきめの細かい念入りな教育をしてあげているのに、なんでポツンと他の子供たちの、普通の健常児の所に行ったら、本当にお客様にしかならないし、全然教育効果も上がらないし、考えてみたらわかるでしょう。これ、ずうっと昔からのいわゆる特殊教育、分離教育を進める側の論議です。

小林あつこさんという石巻のお母さん、このお子さんはダウン症なのです。そのお子さんは小学校・中学校、今高校へ行っているのです。実は高校を1年落とされたのです。それで僕は知り合ったのです。成績上はBでなかったらしい。ダウン症ということで落とされたのです。怒ったよ。1年浪人したのですね。合格して今、普通学校に行っています。成績を見せられてビックリしました。本人が見せたのだからプライバシーでないでしょう。成績優秀なのです。5とか4とか、クラスで34人中13番ぐらいなのです。ダウン症の子ですよ。他の子はいったい何なだ、と言われるかな。その小林あつこさんが言ったら、すごくわかりやすい論理だった。

養護学校はイヤ

「養護学校に行ったら良いよ。」と言われたら、「いやです。」と言って普通学校に入れたのです。その時に「どうせ、この子は学校を卒業したら社会に出されるのですよ。養護学校は手厚く障害にあった少人数学級で面倒見てくれる。それは結構、死ぬまでそうやってよ。」と彼女が言ったのです。「死ぬまでそうやって、だったら良い。」

養護学校を出たら、後ポーンとそれこそ、健常者がいっぱいいる中に。だったら早いほうが良いでしょう。わかりやすいね。実態を見ていると、これは実は、経験している方みんなおしゃいますけれども、障害児にとってということもありますけれども、健常児にとって良いのね。

だいたい一番先に理解するのは健常児というか、周りの子なのですね。すうっと入っていく。いつまでもなかなか溶け込めないというのは親御さんの方です。「なんだ、うちの学校に知的障害者、おかしい、うちのこの勉強が遅れる」とか言っている。お子さんの方はすうっと入ってしまう。そうやって健常児が自然の中で、知的障害を持っている子はこ

うなんだ、と分かって社会に出て行く。そういう構成員がたくさんいる社会の方が、たぶん住みやすい。さっきのようなビックリするような意見出てこない。だから、やっぱり統合教育はすばらしい。

地域の底力

時間がないので統合教育だけではないのだが、それにもう一つの部品としていった場合に、我々がやるべきことというのは、地域の底力を付ける。これNHKの番組でもなんかあるね。「地域の底力」というのは大変良い言葉だと思っています。その意味するものは、つまりある専門家とか、たまたま障害に関わっている行政とか、そういうのではなくて、地域の構成員全部の総力としての底力。しかも、あんまり臆決してというのではない感じがあるのだね。この状況下に、地域の底力というときに。普通にしていってその地域が障害者も温かく包み込む。そうでなければ逆に出せませんよね、こういう人たち。

あんまり時間があると安心して、いろいろ脱線しながらしゃべったので、大事なところ、これからもしお許しただければ、1時間半ぐらいしゃべる。

人権の問題は大きい

人権の問題というのは非常に大きいのですね、人権の問題と難しくいわなくても、例えば知的障害を持った若き女性、ある種の男性からしましたら、すごいおいしいエサなんです。どぎつくわかりやすく言うと。性的にかなりあくどいことをやっても、この人たちは訴えられない。訴える能力がない。つけ込みますよね。悪い男性が。

だとすれば、これは解りやすい例で言いましたが。男性だってそうです。お金をだますということをやります。簡単にだまされます。加害者になることはほとんど考えられないですね。詐欺の場合。だけど被害者にはものすごくしやすい。だとすれば、これを行政がそれを四六中見ているとか、グループホームでも世話人だけが見ていれば良いかという、そうはいかない。勤めの場に出れば勤めの職場の人たち、通勤途中においては住民の方が、そういった人たちをそれとなく、見守りをしていないと危なくてしょうがない。そういうことの総和が地域の底力だと思います。

知事への手紙

ほんの2～3週間前に、私のところに手紙が来ました。毎日僕のところには、何十通とまでは言わないけれども、知事への手紙、知事さんあのね？というプロジェクトという企画があって、それは私が知事になって2年目に始まったのです。県政だよりの4月号と10月号に綴じ込みにしてあって、そこにいろんな意見を送って、受取人払いにして、必ず知事は全部読みます。最初のうちは全部、手書きで返事を出したのですが、さすがに出来なくなったので、今も全部返事を出していますけれども。だけどチョット、インチキ印刷ね。ここだけで言いますけれども。

自分で書いたかに、そのまま書いたかに思えるような印刷方法があるのね。本当は印刷なのです。もともとは私の字なのです。それで返事をしていますけれども。これまで10年間、毎年1,600通というレベルは変わらないという、これが不思議なんです。そういう中で2通が同じ日に届いたのです。精神障害者のグループホームについてです。精神障害

者のグループホームを造りたいという人が、実は地域の反対でできないのです。「知事さん、何とかして下さい。」という手紙が届きました。

同じ日に、もう1通は私たちは精神障害者について理解が決してないわけではありません。だけど、どうも信頼できない。無理押ししてくるので我々としては納得いかない。「何とか知事さんして下さい。」と言っている。賛成というか、グループホームを造りたい、阻止したい。両方同じ日にたまたま届いたのです。パッと見ると、反対してなんだと、叫びたくなるのですが、文面を読んだだけでも、その人は相当に考えの深い人だとわかるような文章でした。そこに田島良昭を出しました。

反対には反対の理由がある

今、途中の結論ですが、「知事、会って下さい。すごくいい人だ。」反対する人ですよ。グループホームを造ることに反対している人ですよ。やっぱりそれなりの反対の理由があるのです。進める方がちゃんと説明していないとか、長年のいろんな意見の行き違いとかがあるのです。それは行って話を聞かないとわからないのです。そこで知事、聞いて下さい。そして、その上でちゃんと解決方法はありますか？ それは福祉事業団がグループホームの運営をやるというようなものです。今、現在進行中ですからどうなるかわかりませんが？

今、これを解決、改革をする中で地域の底力は間違いなく付けます。私の考えているハッピーエンドに終わるという前提です。これはもめるのですよ。すうっとはいかないです。その過程において手を抜かないで、我々行政も関わっている人もしっかりと話しをする。解ればその人たちはものすごい力になります。たぶんそこに僕が今描いているのは、単なるハッピーエンドだけではなく、もっとその上で、その人たちはグループホームのサポーターのグループになると思っています。

終わりに

宮城県では何をやっているのか？ 本当に恥ずかしくてなかなか言えないのですが、いくつかを言えば、今のような一つ一つのケースをやっぱり大事にするということだと思えます。一般の抽象論ではなくて一つ一つ。そしてその積み重ねの中で、ストーリーがあるのですから。実話なのですから、登場人物がいる。その各論というか、一つ一つを解決する。あっちでも一つ一つ、こっちでも一つ一つ、それが宮城県全体としてのちからになるのではないか？ そこにはもちろん、基本的な哲学というか考え方がなくてははいけません。それを前提にして。本当はもっと話しかったというのは本音です。

後は皆さんからのご質問で、この辺をとということで、付け加えた方がかわってピッタリになるのではないかと思います。私から一方的に話すのはこれで終了させていただきます。とりあえずはご静聴ありがとうございました。

『絵てがみ』夫婦展

編集責任者・桶屋 善一

「絵てがみ夫婦展」の案内ハガキを金沢市にお住まいの北出孝一さん、加根子さん夫妻からいただき、「行ってみたいな、でも、七尾から金沢までの足がない。」と思っておりました。

この「絵てがみ展」は本多町の電力プラザエルフ金沢で4月27日～5月3日に開催されました。そこで私は5月1日に金沢であった電動車椅子サッカーの講習会に参加して、その合間に移動サービス業者を利用して「絵てがみ夫婦展」を見学させていただきました。

会場には、野菜や草花を素材にして描かれた「絵てがみ」の作品が数多く展示されておりました。絵に添えられた夫婦のお互いをいたわる文章、両親に対する感謝など、心を打つ作品が展示されておりました。

移動サービス業者の方から、北出さん夫妻が「絵てがみ」を始めたキッカケを聞かせていただきました。余暇時間を有意義に過ごしたいということから、夫婦で6年前から通信教育で「絵てがみ」を学び始められたということです。

私もパソコンばかりでなく、何かに挑戦しなければという思いになりますが、やはりパソコンに向かってしまいます。



水の不思議（3）・水の結晶

金沢市・秋本 信子
(管理栄養士)

「水の結晶」という不思議な写真を始めて見たときとても感動しました。雪の結晶とは違う今まで見たこともない美しい六角形をしていたからです。だけど、美しい写真ばかりではありませんでした。水は自然界を映し出すだけでなく、人の心の状態をも映し出す鏡であったことを「水の結晶」の写真が教えてくれたのです。

そこで、ふと思ったことがあります。私は20数年病院の栄養士として働いていましたが、日々作りなれた料理でも、そのときの心の状態、たとえば誰かと口げんかをした後とか、あるいはとても嬉しいことがあった後では作った料理の味が違うものなのですが、そのことを不思議に思っていました。その時の心の状態を映し出していたのは、料理に欠かせない水であったのかと気づかされたのです。

不思議な「水の結晶」の写真が始めて撮られたのは1994年だそうです。今では江本勝氏の本は日本よりも海外で評価されるようになりました。マイナス25度以下で3時間かけて結晶化させて撮る水は、各地の自然の湧き水や世界の水道水ではありません。驚くことにガラス瓶に入れた水に「愛・感謝」「むかつく」などと紙に書いた文字を張ったり、写真の上に置いたり、音楽を聞かせたりして撮ったものです。自然の湧き水や「愛・感謝」と書かれたビンの水は美しい結晶となり、水道水や悪意の言葉を張ったビンの水は結晶化することができないばかりか水が泣いているように見えます。

もっとも、水道水も「ありがとう」などと良い言葉を張ると結晶化するといいます。人の心は振り子のように常に揺れて、なかなか安定した心でいることなどできませんが、イライラしたときに「ありがとう」などとコップに書いたお水を飲むといいかもしれません。なにごとにも水に流すと申しますから。昔の人の知恵に一理あります。



マイブックスルーム

まんがで学ぶ開発教育

『世界と地球の困った現実』

日本国際飢餓対策機構・編 明石書店

定価：¥1,200＋税

書評

まんがというかたちで、より親しみをもち、世界の飢餓の現実には振れることから始まり、社会の仕組み・国際理解・平和・人権・環境を、メディアが報道しない現実も加え再発見、生きることの深さを実感させます。目が開かれるのです。

便利さや速さを求めた文明が、様々な歪みをうみ出している今、地球に生きるものとして、共に生きる愛や優しさを行動に移させてくれるといっても過言はでないでしょう。

川柳裏表紙

本当の愛は 貧乏こわがらず

この句は私の句集の「雑唱」の部に入れてある。この部は私の経験や、大会などの上位入賞句、又、自信作を集めてある。昭和33年以来付き合っている“永遠のライバル”津幡の専能専父さんが選んでくれた16句の中の一つである。

28歳の時先妻と結婚。すぐ長男が生まれ、その10ヶ月後「離婚」という予想もしていなかったことが起きた。その原因は当時私たちは亡父と共に一家で織物工場を営んでいて、大不況の中、大きな借金があり、その借金を銀行へ返せずいたのを不安がった妻の父が指示した離婚だった。本当の愛とは、借金や貧乏こわがらず共に頑張ることだ!! (比)

編集後記

私は地域生活を目指すため5月に「自立生活支援センター富山」で1週間の体験生活を行いました。今までの施設生活で味わうことができない、食事作り・ゴミ出しなどを体験してきました。体験を繰り返し、自立を目指したいと思っています。

「HSK季刊わたぼうし」発刊20周年記念イベントを7月30日（土）にコスモアイル羽咋で行います。テーマは「施設から地域生活へ」です。皆様の参加をお待ちしています。

(Z.O)